

令和4年度自己評価表

【中長期目標(学校ビジョン)】

岩美高生としての誇りと自覚を持ち、何事にも「誠実」に対応でき、他者と「協働」して物事に取り組み、夢に向かって「果敢」に挑戦する人間を育成する。

【今年度の重点目標】

- 1「学力」＝「学ぶ力」の向上と進路実現
- 2「人間性」の育成
- 3地域と連携した学校づくりと魅力化

	具体項目	令和4年度当初			評価結果(2月)		
		現状及び課題	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 「学力」Ⅱ「学ぶ力」の向上と進路実現	基礎学力の向上	【現状】 ・生徒の基礎学力の向上感は約90%を超えており、取組の方向性に期待感が増してきている。 ・基礎力診断テストのD3ゾーンの生徒数20%減を達成し、基礎学力の定着とそのための学習への取組状況が一定程度改善されてきている。 【課題】 ・生徒が向上感を覚えている場合でも、その基礎学力が高校学習水準に到達していないケースも散見される。	・生徒の学力の向上感が85%以上になっている。 ・1・2年生の基礎力診断テストにおいてD3ゾーンの生徒数が年度始めより50%以上減少している。	・各教科でのリスタート学習の取組を全体で共有して実施する。 ・基礎力診断テストにおいて事前事後の取組を行う。 ・授業アンケートの結果を踏まえて生徒の視点から学習指導を行う等の授業改善に取り組むとともに、学び方の指導も含めて生徒の主体的な学びを啓発する。			
	キャリア教育の推進	【現状】 ・ジオパーク学習(1年次)やイワツツミッション(2年次)等の地域探究学習及び各類型の特徴を生かしたキャリア形成支援企画等とおして、課題解決能力や自己理解支援を進めている。 【課題】 ・将来、社会人としてどのように活躍できるかについてのイメージが希薄である。 ・自分の興味・関心、適性や可能性等を見出せず、自らのキャリア形成を主体的に進められない生徒が多い。	・地域との活動をとおして様々な世代の人々と触れ合い、より広い世界に目を向けられるようになっている。 ・生徒の90%以上が本校の教育方針を認識している。 ・進路実現に向けて行動を起こしている生徒が80%以上になっている。	・担任等による個人面談及び進路指導部面談等を充実させる。 →生徒が自分では認識できていないかもしれない可能性や特長に気づかせる。 ・キャリア・パスポートを活用する。 →講演会等での気づき等を言語化・可視化することとおして自分の興味・関心、適性等について考察させる。 →生徒の行動と実社会との関わりについて考察させ、より広い進路展望を拓かせる。			
	進路実現	【現状】 ・令和3年3月卒業生の1年以内の離職率は6.3%となっている。 →低い水準で推移 ・令和3年度3年生の進路目標達成率は100%。第1志望での合格・内定率は93%であった。 ・令和4年度公立鳥取環境大学入試に2名が出願し、2名ともが合格した。 【課題】 ・生徒の主体的な進路情報収集及び開拓の意識が低い状況がある。 ・現状に満足し、より高い目標にチャレンジしない生徒がみられる。	・進路目標達成率100%となっている。 ・第1志望での合格・内定率が95%以上となっている。 ・より高い目標を掲げてそれを実現するために具体的な行動する生徒が増えている。 ・就職1年以内の離職率が県平均以下となっている。 (参考：令和2年度3月卒業者分鳥取県平均離職率7.2%)	・進路志望調査「後」の個別指導を充実させる。 →生徒の主体的な最新進路情報の収集を啓発 →高い目標を掲げ、進路実現に果敢にチャレンジさせる指導の強化 ・各種ガイダンスや事業所説明会等を充実させる。 →狙いと目的の明確化 →社会が求める力を把握し、その力を習得するための方策を具体的に指導			
性2 「人間性の育成」	基本的生活習慣とマナーの確立	【成果】 ・頭髪服装検査で再検査となる生徒数は10～20%。ほとんどが軽微な違反であり、各学年で細かく指導をしている結果である。 【課題】	・頭髪服装指導において再検査を受けなければならない生徒が10%以下になっている。 ・挨拶、返事、頭髪服装等の基本的生活態度が良好な状態が維持され、生徒の肯定的自己評価が90%	・日常的な指導と定期的な全体指導を充実させる。 ・指導部ノートを有効活用する。 ・生徒・保護者に丁寧に説明するとともに適時な連携による指導を徹底する。			

		- 令和3年度学校評価アンケート(12月)の生徒の回答をみると、校則やマナーの厳守、挨拶や返事の意識は高いが、授業の開始時間や集会の集合時間にルーズさが散見される。 - 令和3年度歯科検診において虫歯があると診断された52名のうち、令和4年1月時点までに通院し治療を受けた生徒が26名(50%)となっている。	以上、職員の肯定的評価が80%以上となっている。 - 歯科検診において虫歯があると診断された生徒のうち、60%以上の生徒が通院し、治療を受けている。 - T E A Sの取組を通して、ゴミの分別・減量化やエアコン等使用電力量の削減に意識して取り組むことができる。	「報告・連絡・相談」を徹底し、各学年、授業担当者と緊密に連携する。 - 歯科検診後、当該生徒及び保護者に速やかな受診・治療を促すとともに、保健日より等をとおして啓発し、歯科検診前の個別指導も行う。 - T E A S研修会を実施するとともに時宜を得て指導する。			
	部活動の振興	【成果】 - 部活動全員加入を原則としており、令和4年度当初時点で未加入者は2名。 【課題】 - 生徒数の減少に伴い、部員確保が困難な部活動がある。	- 全生徒が部活動に加入している状態が継続している。 - 部活動に対する満足度が高く、忍耐力、礼儀、自己肯定感が向上している。	- 部活動指導計画に基づいた適切な運営をとoshi、技術向上のみならず人間的な成長を支援する。 - 本校の実態及び将来像に即した部活動の精選を進める。			
	多様な生徒理解及び自己有用感の伸長	【成果】 - S N Sを巡る問題は常に少なからず発生していると認識はしているが、大きなトラブルに発展した事案は発生しなかった。 【課題】 多様な生徒理解のための取組を継続する必要がある。 (参考:令和3年度生活満足度調査結果) - 学校が安心安全な場所と感じている生徒 61% - 学校の日常生活で困っていることがある生徒 22.9% - 学習面で困っていることがある生徒 11.4%	- S N Sの利用に係るマナーやモラルを守ることができている。 - 周囲に配慮した言動ができるようになっている。 - 学校が、生徒にとって安心で安全な場所になっている。 - 生徒一人ひとりが自己実現を目指し、あらゆる教育活動の中で生き生きと活動している。 - 全教職員が、生徒の発達段階やニーズに応じて援助・支援している。 → 岩美高版UDを意識して効果的な指導・支援に取り組む教員の割合が80%以上となっている。	〈集団指導〉 - 情報モラル講演会等を早期に実施する。 - 全校集会・学年集会・HR等、あらゆる機会を通じて、スマートフォンの扱い方や、S N Sの危険性について啓発活動を行っている。 〈個に応じたサポート〉 - 生徒観察及びアセスメント - 個人面談や個別学習指導 - 保護者や関係機関との連携等 〈教職員向け情報発信〉 - 生徒の自己理解、他者理解を深め、自己有用感を高めるためのヒント等を伝える。			
3 地域と連携した学校づくりと魅力化	10年後、20年後を見据えた岩美高校のあり方創出	【成果】 - 学校からの情報発信強化により中学校等に本校の魅力が伝わり、本年度新入生数が増加した。 - 進学及び就職実績100%を達成。国公立大学を含め4年制大学進学者の割合も増加した。 【課題】 - 本校の教育活動の魅力が十分に地域に伝わっていない。	- 各類型の学習内容の魅力が効果的に発信でき、積極的に地域との交流が図れている。 - 高校が地域の方に誇りを持っている。 - 地域コミュニティの拠点となっている。	- 岩美高校あり方検討委員会を組織し、具体的に検討する。 - 広報担当を分掌に組織し、業務の充実と効率化を図る。 - 各類型の特性をより活かした教育活動を工夫するとともに、内外への広報を強化する。 - 各類型の学習内容の検証・改善を恒常的に行う。 - 生徒が地域貢献を自分事としてとらえる地域貢献活動の機会を増やす。			
	イワッツミッションの発展・充実	【成果】 - 地域連携・貢献が生徒の育成に効果を上げていると感じている職員の割合は7割程度である。 - 地域と連携した活動に対し、概ね理解が得られ、協力体制ができている。 - 第2学年のイワッツミッションでは、類型制の特徴を生かした取組を行っている。 【課題】 「地域に貢献したい」と思う生徒の割合が低下してきている。 - 企画・調整・運営等を行う担当教員の負担が大きくなっている。	地域連携、地域貢献の取組を通して、自らが居住する地域を支える存在であることを理解している生徒を育成する →「地域の行事や活動に参加した延べ人数」(授業として参加するものを除く)が学校全体の生徒数以上となっている。 →地域と連携し、地域に貢献する活動が生徒の人間力の育成に効果を上げていると思う職員の割合が85%以上となっている。 →「地域に貢献したい」と思う生徒の割合が全校の90%以上となっている。	- 地域探究型学習(イワッツミッション)を地域連携の核と位置付けて取組を進める。 → 活動内容を充実及びそのための授業時間の確保 → 岩美町役場等と効果的な連携を構築 - 生徒の探究的活動に係る基本的なスキルの向上を図る。 - 校内ワーキンググループを発足し、これまでの成果と課題を基にプログラムのスキーム及びフレームを再構築する。			

評価基準 A：十分達成 [100%]

B：概ね達成 [80%程度]

C：変化の兆し [60%程度]

D：まだ不十分 [40%程度]

E：目標・方策の見直し [30%以下]